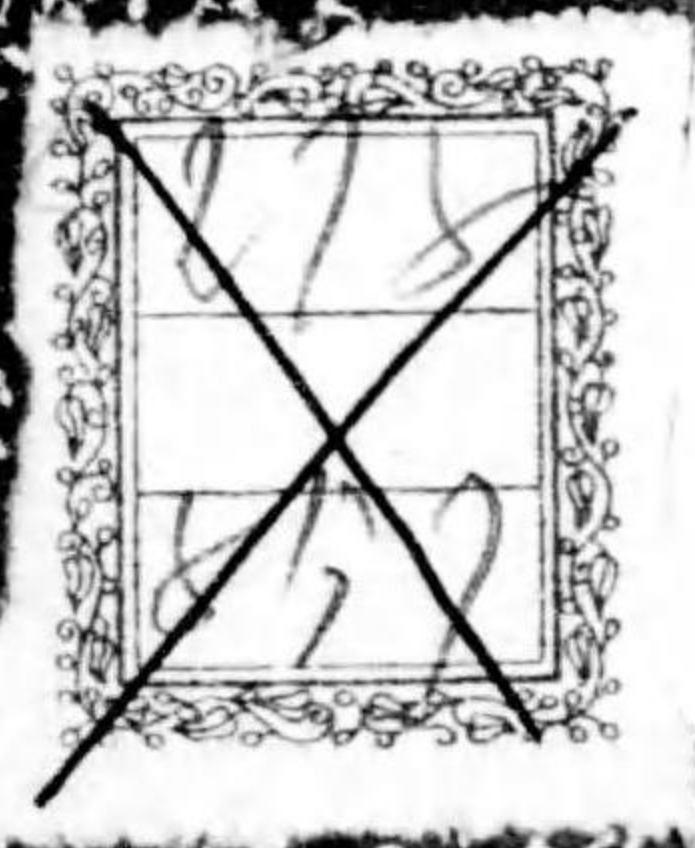


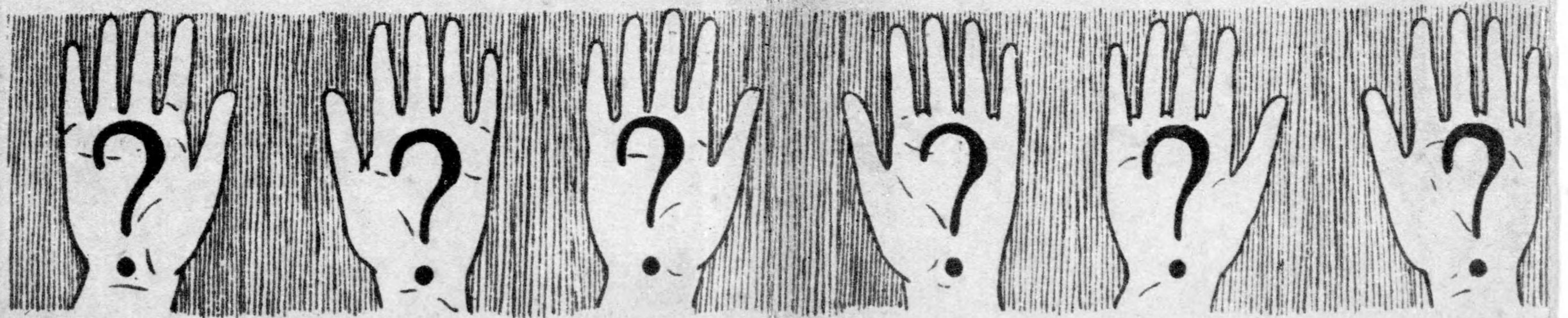
始



徳小治政

特





特100

136



物
増
了
まが

王子
草



この書を敬慕せる新梶主人
和井田富子様に贈る

玉子



町屋寄數谷下
子玉田藤梅者著

序

唯物派の心理學者は「悲しいから涙が出るのではなくて、涙が出るから悲しくなるのだ」と主張します。又た俗に云ふ貫い泣と申しますものも、他人が泣いて居るのを見て自分も自然泣き出すのでありまして、小兒に能く其の例を見出します。斯の如く心と云ふものは外形から支配されることが少くない。私が或時軍隊内を參觀しました時に、兵卒が衣服を四角にたゝんで、尺度で一々計つて一寸一分も違はぬやうに整頓して居りましたから、案内の將校に向つて「こんな事は餘り馬鹿々々しいで

はありませんか』と申しましたら、將校は『如何にも一應は御説御道理
であります。心さへキチンと引締まつて居るなら衣服のたゞみやうなど
は何うでも宜しいのであります。兵卒を教育するには、先づ形をチャ
ント整頓させなければ心も整頓致しません。心をキチンと持つやうに教
へるよりは形をキチンとさせるやうに仕込めば心は自然と直ります』と
答へました。私は其れを聞いて私の考の淺かつたのに赤面しました。
先哲の語にも『居は氣を移す』とあります。外形の如何に依りて心は何
うにでも動くものです。自分の心さへ自分の形で動くのですから、自分
の形で人の心を動かすのは容易の事でありませう。

惚れさするには精神が第一であるに相違ありませんが、其の精神を形
に表はす方法を知らなければ、如何な真心でも相手には通じまします、
イヤ却つて自分の心とは反對の感じを相手に興ふることもあります。心
の中では涙を流す許りでありながら、形では舌を出して御覽なさい、相
手は大に立腹するでせう。

之に反して表情の術を知つて居れば、自分は惚れて居なくとも、相手
を惚れさすことが出来る、自分は悲しくなくとも相手を泣かしむる事が
出来る、其れは前に申した通りの心理學上から説明することが出来るの
であります。

私は此の書を読みまして、私の専門なる心理學上から大に興味を覺へましたから、茲に序文を書くことを承諾しました。

大正五年極月末

M
M
生

序

自分より以外の人に必ず「惚れさせる」と云ふ智慧と手腕があつたならば、此世に於て成さんと欲することは心のまゝである。若し政治家にして多數の國民を「惚れさせる」ことが出来たならば、永久總理大臣で居られる。官吏、會社員にして上官若くは上役の人に「惚れさせる」ことが出来たならば立身成功は思ひのまゝなり。

又主人に使える奉口人にしても、多くのお客を相手とする商人にしても、この智慧があつたならば出世、繁昌は望みのまゝならん。人が世に

處するに一番困難なるは相手方をして『惚れさせる』所謂人心收攬術である。

島津の猛將新納武藏守は秀吉をひとヒシギにせんず勢を以て秀吉の面前に至るやタツタ五分間も経たぬ中に、秀吉に夢我夢中になるほど惚れて了つた。

家康は武田勝頼を亡した時、敗殘の勇士等が主君の仇敵と齒齧をして恨んで居たのをタツタ一度會つたばかりで、心底から『惚れさせた』。これ等の名將はこの『惚れさせるまで』の術の本家本元であつたのであらう。

著者の稼業は藝者である、藝者と云ふものは贅澤な男が、貴重な金と時間とを徒費して買ひに来ると云ふは畢竟惚れに来るのである。惚れに来る男に、『惚れさせる』術や方法は不要なものであらう……とは一寸考へである、百人が百人即ち百發百中と云ふことは、それだけの熟練若くば術を要することである。所が藝者と云ふ商賣は品物を賣るのでなくして心を商ふと云ふ、高底價額の定め得られぬ無形な物を賣つて居る、この困難な商賣を永く營んだ其間に於て得たるお客の心理を基礎として著はされた此一巻は量甚だ少なりと雖も、其内容に至つては人の一寸氣の附かない、奇抜なること多し。花柳業者若くば直接お客に接する商

人等が一讀せば得る所尠なからん。

大正丙辰極月中頃

商人哲學著者 鐵 州 生

自序

妾はこの書物を著はすに付て堅く御辭退を申上げましたけれど、再三再四強てのお勧めに餘儀なく……知つて居りますだけのことを、お話致しました。

若しも此中に一言半句でも可いことがありましたならば、それは妾が永年御最負に預りました偉いお客様方からの頂き物で御座います。

大正五年師走小冬の降る夜

下谷數寄屋町の茅屋にて

梅藤田玉子

お座敷の仕度から
お立際の^{まは}握手まで



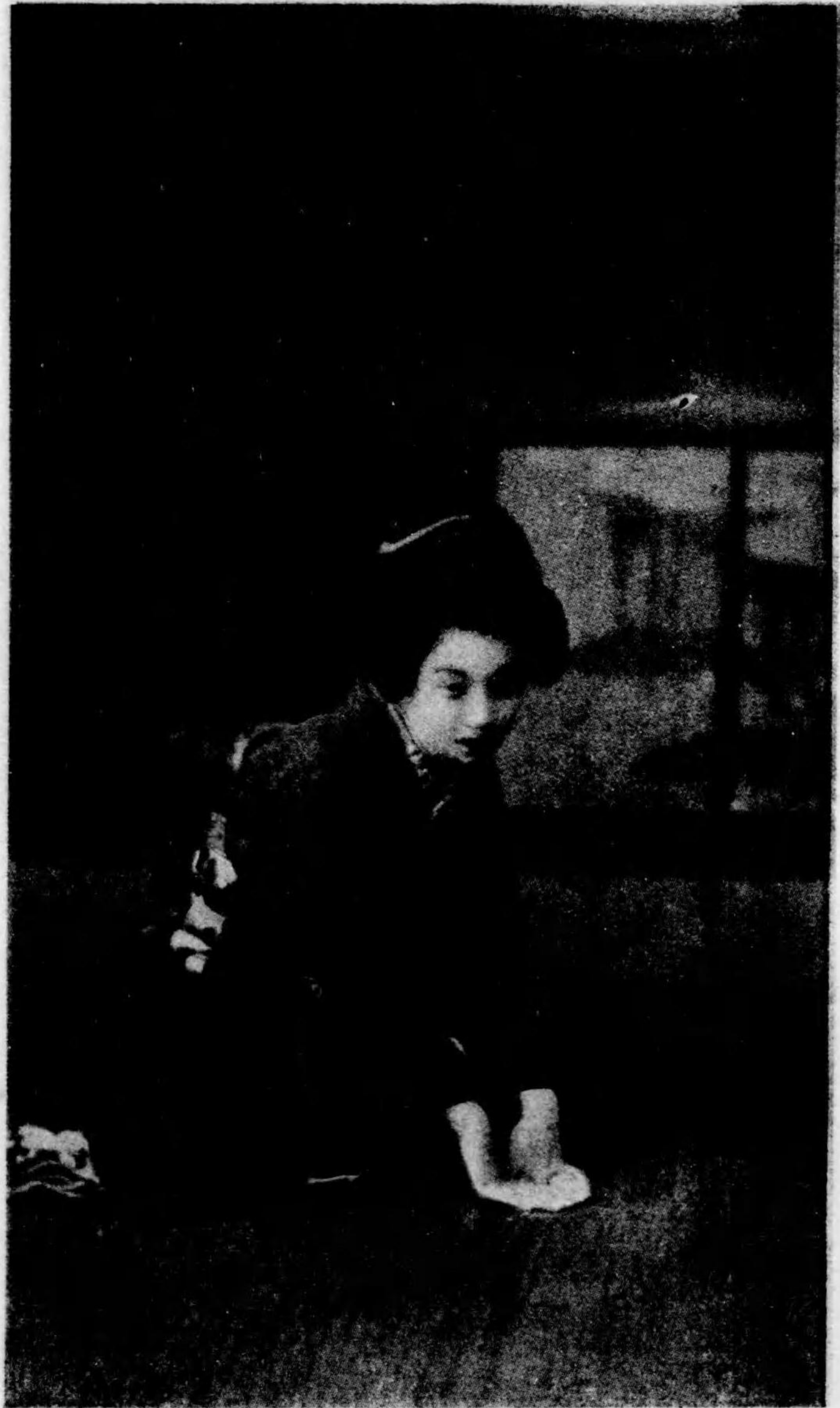
(歳六十) (子ろい家狭若谷下) 度仕の敷座お

一 お座敷の仕度

いろ子さんは今しがた新梶、土地一流の待合さんからお座敷がかゝつて来たので、箱屋の元どんに仕度をして貰らつて居ます。

「元どん……急いでお呉れ、今日は多分大勢さんだらうと思ふから、妾は他の人よりも一足先きに行きたいわー」

いろ子さんは未だ年も若いし、容子も藝者らしい處はありませんが、たゞ温順くつて、應陽く秋の空のやうに澄み渡つた心に無邪氣な處はどうしても中流以上の家庭に育つた人だと思はせるやうな上品な處がある。聞けば濱の或洋服屋の箱人娘さんだつたさうであるが、フトしたところから去年の夏の蒸し暑い日にこの土地にお披露目をしたさうである、今はお座敷の敷も忙しいさやらー。



お座敷の第一印象

二 お座敷の第一印象

大急ぎで来た、いろ子さんは帳場に急がしながらも心を籠めたお禮をして、中の拾疊を聞いて階段を上り、お座敷の入口の唐紙の前に足を留めて、襟や裾の亂れて居る容を直し心を沈めて、唐紙をソツミ開け後を静かにへめて、双手を突き、叮嚀なシトヤカな音聲で「アリガトウ——」と挨拶を申上げて、顔を少し上げるさその瞬間に……いろ子さんの方を見て居られる五人のお客様に百萬言のお世辭に代はるほどの愛嬌を籠めた表情を以て、お客様の御顔を見守つて居ます。



へまの様客お

三 お客様の前

いろ子さんはお辭儀を済まして、二歩三步進んで、お客様の前に座り御愛嬌を申し上げて居ります。

藝者衆は半玉さんと共に十人が、つて居るそうだが、未だ一人も来て居られなかつたので、ホツト腹なで下し自分は憊う云ふ立派なお客様のお居でになるお座敷に魁が出来たかと思ふと千のお金を得たよりも勝る嬉しさを感じた。お客様方は他の藝者衆の来ようが遅いので聊か御不快な面色もありませんが、いろ子さんが全力舉げての御愛嬌振りにトロリさして、チャホヤ言ひながら、お盃は次から次に……。お座敷の遅い九人の藝者衆に對するお客様の悪い感じは反對に魁をされた一人のいろ子さんに集中されて了つた。最早このお座敷は機敏ないろ子さんが確實に占領されました。そうして無邪氣で美しいいろ子さんの顔と姿は五人のお客様が按分比例の分配法で懐中に入れてでも歸りたいほどでしょう。



お立ちの際は握手

四 お立ち際の握手

お客様は藝者衆の来ようが遅かつた爲めに聊か御不興の態でいらつしやつたけれども、いろ子さんが一生懸命に勉められたのさ、女中衆のお取持ち等で、面白くお遊びになつてお立ちになるので、ドヤ／＼と玄關までお見送りを申上げて居ります。大勢の藝者衆は吾れ勝ちに氷のやうな手で握手をして居られますが、いろ子さんは名残り惜しげな表情を浮べて、新発見の——握手法——を應用して、温かい握手をされて居ります。お客様の苦心の裡や如何に？。

惚れさせるまで

目次

藝者の手くだ……………四
 藝者を待たるゝお客様の心持ち……………九
 お座敷の仕度を急ぐ……………一三
 心を商う商賣……………一七
 お座敷の一番乗り……………二一
 お客の心に自分を刻み込む……………二五
 舌三寸で面白く遊ばせる……………二九
 前夜のお詫び廻り……………三三
 お客様から目を離さぬこと……………三七
 シッコイのは惚れられた證據……………四一

親兄弟より大切な人……………四一
 決して自白せぬこと……………四五
 お客と遠出でをする場合……………四七
 親切な手紙は縁切り状……………五三
 お馴染客のカチアツタ場合……………五九
 最後の止めを刺す……………六三
 最新式握手法……………六五
 出来るだけの親切……………六九
 藝者と衣裳の力……………七三
 衣装の撰擇法……………七七

—(を は り)—

花柳哲學より觀たる藝者を買ふ男の心理……………七九

惚れさせぬまで

梅藤田玉子 著

藝者の手くだ

お芝居を觀ましても、淨瑠璃を聽きましても、大抵は色戀が原因で、
 いろくな騒動が起つたやうでございしますが、「雀百まで踊は忘れぬ」で
 誰れでも色戀のないお方はございせん。世間の殿方が藝者をお聘びに
 なりますのも矢張りそれで、何とおすまし遊ばしてゐらつしやつても、

つまりは女の子にチャホヤいはれるのがお嬉しいのでございまして、其處に避藉とやら汽車とやらをお求めにならうといふのでございませうか、藝者の方では此處に氣を付けることが何よりも肝心でございませう。藝者が藝が賣りものだと申しまして、清元、常盤津、その他の遊藝一切に優れてをりましても、たいそれだけでは一流の賣妓になれるものではございませぬ。結局藝者のつとめは世間の殿方のお相手なのでございませぬから、何でも彼でも聘んで戴いたお客様のお氣に召すやうにと、工夫をして、好いて頂かなくてはなりません。これが藝者の手練手管と申すものでございませぬ。中には手練手管とは妙な素振りを見せてはお客様

の鼻毛を引張つてお金をせしめることのやうにばかり考へてゐるものもございませぬが、これは大きな間違ひでございませぬ。ところが此の頃の藝者衆の中には、随分かうした不心得な方が多いやうで、先日も或るお客様が「此の頃の藝者なんて樂なものだ」つて仰言いますから、何がそんなに樂なのでございませうかつて聞きますと、「此の頃の藝者なんて奴は、たい何か喰いたい、何處かへ行きたいと勝手な贅澤を爲たり云うたりして居て、それで好いことに思つて居る」んだつて、まあ随分なお言葉ではございませぬが、どうやらそんな藝者衆がたいぶ其處らに居られますやうで、お客様を遊ばしてゐるのだから、お客様に遊ば

して戴いてゐるのだから商賣に來てゐるのだから、遊びに參つて居ますのだから、かまつたく「勝手なことを言つたり爲たりしてゐて好いことに思つてゐる」と云はれましても仕方のないやうな妓もあるやうでございます。

藝者を待たるゝお客様の心持ち

そも／＼藝者商賣で渡世をしやうといふものでございしたら、先づ何よりも第一に自分等を聘んで下さるところのお客様のお腹の裡をわきまへてゐなくてはなりません。たゞかう申しましたのでは、いくら頭のはたらきの足りない藝者だつて、まさかにそれ位のことを考へてゐない

やうなぼんくらはないと仰言るかも知りませんが、ところがそれが尾張り名古屋のシャチホコダチで、自分では考へてゐる、わきまへてゐると思つて居りましても、それがとんでもない間違つたことを考へてゐるのが多いやうで、前にも申しましたやうに、此の頃の藝者がお座敷へ參りましても、商賣に來てゐるのだから、遊びに參つてゐるのだからわからぬやうな怪しからぬ態度になるといふのも、これスナハチこの大切な肝心のことをわきまへて居らないからでございます。

さて、それではその大切な、お客様の心理とは——それは追々に考へて行くとして、先づ殿方が料理屋なり待合なりにお出にならうと思ひ立

ちになつた時からのお胸の中を考へて見なければなりません。何人に致
しまして、歌舞伎座へゐらつしやるのに、まさか花月のお辨當がおい
しいからと云つてお出でになります方もございませんでしようし、出語
りが上手だからとおつしやつてお出かけになります方もございますま
い。矢張り歌右衛門さんの十六夜が好いからとか、羽左衛門さんの與左
が見たいからとか、または今度は新作ださうだが、左團次さんはどんな
役をおやりかしらと、役者衆のことをお考へになりますやうに、料理屋、
待合へお出でになりますお客様でございましたら、先づ料理のよしあし
をいふよりも藝者のことが先きにお氣にかゝるもので、今日はどの妓を

「聘けやうかしら」「ごんな妓を聘ばうかしら」とお思ひになるものがござ
います。

これがお一人でお馴染が定まつてをりますのでございましたら特別、
「いつもあの妓ばかりでは」と云つたやうに一寸活氣なお心をお出しにな
りましたやうな場合とか、または大勢さんでお出でになりましたやうな
場合などで、料理屋なり待合なりの女中衆に、「誰れかお前の方でいゝや
うなのを」とおまかせになりました時でございましたら、尙ほ更ら聘け
た藝者の來るのがお待ち遠ふにお思ひになるものでございます。電話の
ベルのチリン／＼と鳴るのが聞えて來ましても、ごんな妓が來るのかし

ちとお考へになりますのはまあ當然で、女中衆から「直ぐに参ります」
と返事がありますれば、中には「ごんな妓が来るのだえ」ぐらゐはお
聞きになる方もございませう。「え、年齢は十八で、ぼちやくした愛嬌
のある妓なんぞございますよ」なんてお返事を申しますれば、……ぼち
やくした愛嬌のある妓つて、ごんな妓かしら……矢張りお考へにな
らずにはをられません。兎も角、お客様といふものは、料理屋や待合の
お座敷では、藝者の來るのを待ち焦れてお出でになるものでございま
す。

お座敷の仕度を急ぐ

藝者の妾の口からかやうに申しましては、何だか自分ばかりを云つて
ゐるやうで、こんなことをお客様方へ申しましたら「自惚れちやいけ
ない。女早りの國から來たものぢやあるまいし、誰れがそんなお前等を
珍重さうに待ち焦れてなんかゐるものか」つて、藝者を待ち焦れてゐる
なご、云はれて、御身分にもかゝはりますやうに仰言いませうが、これ
は、藝者はいつもこれ位にお客様のお心持ちを想像てゐなければならな
いといふことでございます。と申します譯は、藝者は商賣で、自分は

商品でございます。何處へ参りましても商品となりませれば、珍重さうに申すではございませんか、呉服屋さんへ参りましても商品となりませれば、木綿縞一反だつて、こんな品はざらにある柄ですとは申しますまい。そして先づ『お年齢はおいくつ位で……』『それにはこんな柄が』となるべくお客の氣に向きさうなものをと考へるではございませんか。そこが商賣といふものでございます。藝者も商賣でございます。なるべくお客様の氣に召すやうにと考へてゐますには、お客様の氣持もそれ位までには想像をせねばなりません。

と、これではお客様方のお心持がわかつてをりますれば、これに

對して藝者がどういふ態度にしなければなりませんか、それは云ふまでもないことで、五分間でも支度を急いで、早くお座敷へ参つてお客様の氣に召すやうにすることです。それは申すまでもなくお客様に忠實な商賣法でございまして、お客様に忠實なことは結局自分の商賣にも忠實になるわけです。

ところが實際はどうでございませう、却つてこれでは反對で、甚だ自分の商賣にもまたお客様にも不忠實な商賣法をやつてをるのでございませぬ。

申すまでもなく、藝者がお座敷のかゝつて來ることを待つてをります

ことは、情人の便りを待つよりも一層甚く待つて居りますので、朝目が覺めた時からもうその日のお座敷のかゝつて來ることばかり考へてをりまして、電燈の付く頃にでもなりますれば、これより外には何も考へてゐないやうに待ち焦れてゐるのでございます。さきにお客様は料理屋や待合のお座敷では藝者の來るのを待ち焦れてお出でになりますと申しましたが、藝者のお座敷を待つことは到底それとは比べものにはなりません。これは當然のお話でございまして、お客様の方はおなぐさみ、藝者の方では夫が渡世の大切な生命の綱、お金の出ると入ると大した差でございしますもの、そこに相違のあるのは申すまでもない事でございます。

心を商ふ商賣

これ程藝者の方ではお座敷のかゝつて來るのを待つて居ります癖に、さてお座敷がかゝて來たとなりますと、いやに落付いてしまひます。これはあんまり待ち焦れて居つたので、漸やくかゝつて來ますと、それですつかり安心してしまふからでございます。下卑な譬でございしますが、あんまりお腹の空いた時に御飯を戴きますと、眠氣がさして來まして一寸は立ち上がれないことがございますが、藝者のお座敷も恰度そんなものでございます。これと云ふのが、「お客の心理を解てをらないから」

で、お座敷へ行くのはお客様の招きで、お客様の爲めに行くのだと云ふことを考へずして、たゞ自分の爲めに、自分の商賣に行くものとはかり思つて居るからでございませう。かうした間違つた考えでございませうから、同じお座敷を待つてをりますにしましても、これに叶ふやうな準備もなにも致してをりません。中にはかゝつて來たつてあんまり早く行つたのでは如何にもお茶引いてゐたやうだなんて、とんでもない虚榮を張つたりなご致しますものでございませうが、これなどはまつたく言語同斷と申しませうか、とんでもない考へ違ひで、こんな量見で居りますからだんく何様もお聘け下さいませんやうになつて、いつもお茶ばかり

引いてゐなければならぬやうな態になるのでございませう。兎も角お座敷のかゝつて参りました時には、其處には一人なり、または幾人なりかのお客様が、自分の來るのを待つてゐて下さるのだと思はねばなりません。かうして、自分のやうなものでも聘んで、待つてゐて下さるお方があるのだと思ひましたら、どうしてぐずぐずしてをられませう。精々早く参つて、そのお客様のお氣に召すやうにしなければならぬと考へなければならぬことは申すまでもないことで、ごのお客様にも忠實を盡し、また自分の爲めにも忠實な方法をとると云ふことは、商賣繁昌の第一の秘訣であることを忘れてはなりません。これは恐らく何の商賣でも必

とさうだらうと存じます。たゞお金を戴ひて、品物を差し上げますばかりがほんとうの商賣の道ではございませぬ。精神を盡して賣ることがほんとの商賣の道で、信用とはそこから生れるものと思ひます。殊に藝者は商賣々々とは申しまして、外の商賣ものゝやうに役に立つ品物を差し上げる譯ではなくて、心と云ふ形の無いものを商つて居る商賣でありますから、つまり呉服物など見たやうに仕入値段と云ふ原價がありませんから、つまり大安賣りや、見切り賣りをして決して損をするに云ふ氣遣ひはありません。例えば拾圓のお遊びを、他所で五拾圓散財はれたのよりも面白かつたと思はせることは、この心理を能く心得てなせば必

ず出来ることでもあります。なほ親切を盡して大安賣りをしたお客様は勘定などもごんなに工面をしても必とお拂ひになるものですが、これと反對に高賣りをしたお客様は、たとへお持ちになつて居てもお延しになつたり、終にはお拂ひにならぬやうなことがあります。こう云ふ損害は藝者衆の責任で、又折角最負に聘けて貰つたお料理や、待合さんなどに對し恩を仇で報ひるやうなものであります。

お座敷の一番乗り

次に商賣には、何の商賣にも商賣敵と申すものがございまして、

競争のあるものでございます。藝者も矢張り商賣でありますから、この商賣敵があるのですが、藝者にはなか／＼それが多勢で、常は仲のよいお友達でもいざとなれば矢張り牙をムイテ競争ふところの恐ろしい賣商敵でございます。であつて見ますれば、何でも彼でも此れ等の商賣敵に打ち勝つことを心掛けねばなりません。それにはいつでもお座敷のかゝつて來ましたときには、そのお座敷へ行くものは自分一人でない。必と二人か三人、或は五人か拾人か、外にも聘ばれてゐるものとの覺悟を致さなければなりません。さう思へば、その人達よりも遅れてならないやうに、その中の誰れよりも一足先きにそのお座敷へ行

つて、其のお座敷を占領しなければならぬといふ考へが浮ぶのは當然で、常に心掛けてゐなければならぬことでございます。お座敷へ早く行くと云ふことは、たいお客様の氣持ちに叶ふと云ふばかりではございませぬ。これが競争に勝つ第一の秘訣で、イワエル商賣繁昌虎の巻でございませぬ。たとへば「いろ子」さんが大勢さんのお座敷へ誰れよりも先きに參られたと云ふことは、

昔の武士が戦場で「一番乗りをされたのと同じでございます。自分と一座する藝者は、自分とお客様を奪ひあふ大敵である」と云ふことを忘れてはなりません。彼の宇治川の戦で、佐々木高綱が梶原を欺し

て先きになりましたのは、敵の陣地に一番早く乗り込んで「一番乗り」の功名手柄がしたかつたからでございます。その時の高綱の敵は、當の敵の義仲の大軍ではなく、味方の友達なる梶原であつたのでございます。若しもあの時高綱がぐずぐずしてゐましたなら「一番乗り」の功名手柄は當然梶原に奪はれてしまはなければなりません。申しますれば、この時の高綱にとりましては、この梶原一人が大軍の大敵の前に於ての大敵だつたのでございますから、高綱は巧妙なる計略を以て梶原よりも先きになつてしまつたのでございます。武士が戰場へ参りますのは、巧名手柄が目的でございます。

この目的を他の人に奪はれる位でございましたらば、寧ろ出ない方が遙かに増しでございます。人に嘘偽りを申してならない武士でさえも、戰場へ参りましては、味方の友人を欺つて迄も先登を争つたものでございます。藝者がお座敷へ出ますのも恰度これと同じ道理でございます。この宇治川の戦ひに於ける高綱のやうに先登を争はなければ、常に多くの味方の梶原（一座する連中のこと）に巧名手柄を奪はれてしまいます。若しもこれが自分一人だつた時には、前にも申しましたやうに、いくらかでもお客様に満足をして戴くことが出来ますが、これが大勢さんであつた場合には今も申しますや

うに、お友達と云ふ恐ろしい商賣敵があるのでございますから、ごうしてもこの友達の連中よりも先きに「一番乗り」をすることが大切なことでございます。

お客の心に自分を刻み込む

先にも申しましたやうに、お料理屋、待合へお出になりますお客様は何よりも其の日、その座へ参る藝者をお待ちになつてお出でになるのでございますから、お客様の方が一人であるとしても、または五人十人の多勢さんだとしても、一番最初に「アリガトウ」と入つて來ま

した藝者に一番深くお眼が止るのは云ふまでもないことで、自然「お前の名は……」とも聞いて下さいませし、何だかだとチャホヤもして下さいませるものでございますから、こゝで精々お客様へいゝ感じを送つて置きますれば、其の次ぎからはお名指しで聘んで戴けるやうにもなりますので、これで兎も角お客様のお心の中へ自分と云ふものを刻みこむことが出来ましたので、先づ惚させる第一歩でございます。

これに引きかへまして、外の人よりも遅れて來ましたとしますと、その結果はごうでございます。まだせめてもに二番目に参られますればまだしもでございますが、それから遅れて参りましたのでは、その日

その座へ参ります藝者と云ふものに對するお客様の興味が大半最初の一人か二人に獨占れてしまひまして、それから後に参りましたのでは珍らしくもないヘンな女が來た位にしか思はれないもので、もう座も亂れて、やがてお開きにならうといふ頃になりました、どんじりにやつて参りましたのでは、忠臣藏の打入りではありますまいし、まさか大音聲に名乗を上げるわけにも参りませず、そのまゝ名前さへ御披露することも出来なくて、寧ろお客様からは不用なものが來た位にしか思はれないのでございます。廣告の盛んな今日此の頃、こんなへまな商賣をして居て、どうして満足に立ち行くことが出来ませう。

併し、藝者も人間でございますから、ごんなに氣をつけて居りましても止むないところで多少は遅れる場合もないとは限りません。止むなくさうして遅れました場合には仕方ありませんから、そこは臨機應變の處置に出るとしまして、なるべく他人様よりも變つた、お客様の御眼を引くやうな態度を致します。

これはもうお座敷へ参りましてからのお話でございしますが、さてお座敷へ参りましたなら「これからがいよいよ本當の藝當にとりかゝるわけで、一番先きに行つた時でも、または遅れて二番三番になりました時でも、先づ「アリガトウ」とお挨拶を致しまして顔を上げます。此所が最

も大切な所で、まア素人衆の見合——それ位の積りで、お客様の用心へ
ピリ／＼と電氣のかゝるやうな表情をしなければなりません。お芝居
では當節では筋や臺白ばかりではいけない、表情がなくては駄目だ、と
やかましく申されて居る世の中でございます。藝者が——女が殿方の前
へ出るのでございますもの、そこは立流に、お客様に充分いゝ感情を持
つて戴くだけの態度をしなければなりません。

早起は福貴の基とか申しますが、藝者には早起きは出来ませんが、早
起きよりもお座敷へ早く行やうに心掛けることが大切なことでございます。
す。前にも申し上げましたやうに、お客様には喜ばれ、お料理、待合か

らは可愛がられ、あの妓はいつも支度が早いからと云ふので、急ぎのお
客様の時には第一番に聘けて戴ける。これに反していつも支度のだら
／＼手間取つて居る妓は、お客様には勿論、料理屋、待合の感情も害ね
てしまうものでございます。こんなことで満足に商賣がやつて行ける道
理はございません。

舌三寸で面白く遊ばせる

これまで長々と申しましたが、いままでのところはほんの序の口、昔
の芝居の三番叟、今の新しい芝居ではない、劇とか仁木とかの開幕劇

とか云ふもので、何と云つても藝者の氣を付けねばならぬ肝心なところは
はお座敷で、そのお座敷で一番大切なことは座敷もちの上手といふこと
でございます。

座敷持にもいろいろありまして、藝事をするのもその一つでございます
すが、これはお客様が藝好きなお方でなくては、いくらツンテンやつて
も駄目でございます。たい喜ばれないばかりかうるさいなご、お小言
を戴くこともございます。藝者を聘んでおいて、踊つたり唄つたりする
のがうるさいなごは、随分野暮な方のやうでございますが、しかしこれ
は、お客様の御趣味が違ふのでございますから、藝者の方から苦情を申

すわけにはまゐりません。藝者は藝を賣るだけが藝者の仕務ではないの
でございますから、どこまでもお客様の御趣味に合ふやうにつとめて、
精々お客様のお氣に召すやうにと考へなくてはなりません。オイトコも
唄へば、藤八に負けても見せ、金比羅船まで飛び廻りもしなければなり
ません。その他遊ぶ方法は數限りなしでございますが、中でも最も大切な
ことはお座談でございます。何でも矢野さんとか申します偉いお方のお
書きになつた「藝者論」とか申す御書の中にも、毎日三度の御飯を掻込む
だけの口があつて、その上藝者をする程の度胸がある妓だから、談話の
出來ないやうなものはあるまいと思つたに、それは餘程ムツカシイもの

と見えて、座談の上手な妓は、藝の上手な妓よりも少ない、と仰言つて
でございましたが、まつたくこれ程むつかしいものはございません。お
客様と對座で絶句して支舞ふやうなものでなければ、お客様には興味も何
もないことを、舌先に馬力をかけて喋べ繰り返すやうなのが、おほうご
ざいます。妾なども務めて此點に氣を付けて居る積りでございますが、
誰も彼ものお客様を満足させるやうなお話は一度も出来た事がございま
せん。これは第一世事にうとく、凡ての智識といふものがないからでご
ざいます。

前夜のお詫び廻り

お座敷の範圍は出來得るだけ廣く、お客様はなるべく數多くとること
が一番肝甚であります。お客様の數を多くとると云ふことはこの藝者は
かりでなく、凡ての商賣も同じことでしょうと思ひます。たとへば小間
物屋さんにしても一ヶ月十人のお客様に五百圓賣るよりも百人のお客様に賣
る方がどんなによろしいか、又利益かも知れませんか。
一寸考へると少數のお客様が澤山買つてくだされば、面倒がなくてよろ
しいやうなもの、それでは發展の見込みの少ないと多少危険が伴ひま

す。若い藝者衆にはよくありがちのことですが、少し氣に入つたお客様のお座敷に行くとき、折角かゝつて来た、後口を打チャラかして迄も長く居るやうなことがあります。それは氣を付けなければならぬことです。それから少し大遊びをなさるお客様にかゝると、他のお座敷を断つて、入りびたりになることがあります。これは餘程注意をしなければならぬことです。

しかし其お客様が一身を引受けてくださるほどのことになれば、他を犠牲にしても損はありませんが、その見込みのつかぬときは、前に申上げた如く、よく考へてなさなければなりません。お客様の方でも御商賣の都

合で一時に御儲けなさつて、大遊びをなさることもありますが、それは決して永く續くものではありません。お金が續かなくなるか、又遊びに飽きられるか、どちらにしても、コツチには利益にならぬ様になります。それからもう一つ注意をせねばならぬことは、お座敷の忙しい時に無暗に稼ぐことがあります。例へば十時から三ツのお座敷を務めたなごど云ふことがよくありますが、これは其時は多く稼いだから大變儲かつたやうに考へられます。實は損失をして居ります。例へば呉服屋さんが忙しい紛れにお客をあらましに取扱つたのと同じことで、お客様は決して好い感じは與えて居らぬのであります。殊に此藝者はお客様は

かりでなく出先にも氣に入るやうにせなければなりませんから、こんなあらましな不親切なお座敷を度々して居ると、自然暇になるやうになります。

それにお座敷に出て居る中に、懇意な處から後口がかゝつて来た時、自分は飛んでも行き度いと思ふても、どうしても其お座敷が貰えな
いことがよくありますが、そう云ふ時は、仕方がありませんから、其翌
日にでも其の出先に行つて前夜の始末を都合好く(商略上巧妙)お話ししてお
詫なし、『アチラがお出でになりましたなら、濟みませんが一寸お知らせ
してください、お詫びに伺ひます』と慫ふ云ふ風に親切を通じて置けばな

る程餘儀無いことであつたらうと云ふ同情が必ず来るものであります。
前にも申し上げた如く、心を商ふ商賣でありますから、失敗つてもスグ取
直しをすれば、反つて前よりも好くなるやうなことがあります。

お客様から目を離さぬこと

それからお座敷でわけて氣を付けなければならぬことは、人姦ましの
我面白とか申しまして、お客様を忘れて自分ばかりの興味で饒舌り散
すことでございますが、この他にもう一つ氣を付けなければならぬこと
はお客様が二人以上でおいでになりました時、會社のお話だとか、御商

賣上のお話しだとか、あんまり藝者たちには関係のないやうなお話をなさる方がございます。藝者も一人で聘ばれたときでございましたら、止むなく黙つてそれを聞いて居りますが、もし藝者が二人以上で居る時にはお客様の方でそんなお話が出るやうに成りますと、もう自分等には用がないものゝやうに考へて、今度は藝者同志で勝手な話を初めます。まるでお客はお客、藝者は藝者といった調子になつて仕舞ひますが、これはお客様も氣持を考へてゐない事で、大低のお客様は、わざ／＼そんなお話をその席でお話になると云ふのには、チャンと目的があつてのこと、たい何でもないことをわざ／＼高いお金をお費しになつて、藝者を聘

んでおきながら、たゞくだらなくお話しばかりして居られるものではありません。だから、んな場合、藝者の方で一寸もお客様の方へ氣を付けないで、自分等同志いゝことにして話し合ふやうな事があれば、お客様の方では吃度不快なことにお思ひになるに違ひがございません。兎も角藝者はお座敷へ出た以上はどんな場合にもお客様の方から眼をはなさないやうに絶えず心を配つてゐなければなりません。すべてお客様の氣に入るやうにしやうと云ふのは、そうした氣の配りかたが大事なことでございます。そこが表面だけの商賣でなく、心を盡して取引する大切なところでございますから、くれ／＼も此點に十分の注意を拂つてゐなければなり

ません。

シツコイのは惚れられた證據

それから、大抵の妓はシツコイお客様を嫌ふものでございますが、これなども藝者商賣とはお客様を遊ばせることが任務だといふことを考へないで、却つて情人同志で遊ぶことか、又はお客様に遊ばせて戴くことかのやうに誤解つた考へを持つてゐるからでございます。お客の心理を解つてゐないものと云はねばなりません。

兎も角藝者商賣とは精神を賣ると同時に身體も賣つてゐなければなら

ないものでございますから、すべてはお客様のお求めに應じて、出来るだけのことを盡さねばなりません。わけてシツコイお客様と云ふのは自分を好いて下さつたお方であります。好いてゐて下さればこそシツコクなさるものでございまして、もし好いてゐないお方でございましたら何でそんなにシツコクされるものでございませう。

ところが世間には誤つた考へを持つてゐるものもございまして、自分を好いて下さるお方は、自分にとつて一番大切なお得意様でございます。この大切なお得意様を嫌つて自分をあんまり好いて居らない人を喜んで「今日のお客様はほんとにいゝ人よ、ほんとにあつさりしてゐて好い人

だつたわ。私あんなお客様にまた聘ばれたいと思つてよ。」よくこんなことを申す妓がございませうが、何と間違つた考へでございませう。あつさりしてゐるお客様とは、自分をあんまり好いて居られない人でございませう。譬へばお膳が出ましたとしても、自分の好いてゐるお料理にはすぐ箸が付いて、皆までもお上りになります。嫌いなものだつたら一寸位箸を付けて御覧になつても、決してお替りをお取りになるやうなことはございませぬ。あつさりしてゐるお客様といふのは、自分にあんまり箸を付けてくれなかつた人、二度とお替りを注文してくれないお方でございませぬ。そんなお方を「あのお客様は好きだ」なんて、まるで自分の方でお

金を出して賣つてゐるやうなことを云つて居るなどは、正直のところ藝者商賣で渡世をしてゐるもの、正氣で考へてゐることかと思はれる程の心理状態と云はねばなりません。

親兄弟より大切な人

モチロン自分の方で好いてもゐない方からシツコクされては嫌やなものに違ひございませぬ。しかしそれは考へ方が間違つてゐるからで、兎も角自分のことについて少しでも氣を付けて下さつたり、心配して戴けたりする方は、この廣い世の中に、そしてこの六千万の人々の中でた

つた一人か二人の親兄弟があるばかりで、他には誰一人他人のことなご心からかまつてやらうなごと思つて下さる方があるものではございません。みんな自分とは関係のない人か、恐ろしい商賣敵の人ばかりで、その中に一人でも自分を好いて下さる方があつたことしたら、それは誰よりも大切にしなければならぬことは云ふまでもありません。高い税金を拂つて商賣をしてゐる以上は、何よりもお得意様が大切でございます。お得意様を大切にすれば、注文のふえることは間違ひないことで、商賣をして行く以上は誰でも忘れてならない大切なことでございます。あつさりした方々々々つて、ごんなに自分の方で好いたところで、對手様

が自分を好いて下さらなければ、商賣は立ちゆきません。また遊びにお馴れにならないお客様で、氣取られる方は別ものとして大低のあつさりした方と云ふのは、自分をお好きにならないで、却つて氣に喰はない嫌なアマツチヨダア位にお思ひになつても、折角澤山のお金をお費ひになつて、お聘びになりましたものだから、御自分から求めて不氣元な顔になさることもつまらぬこと、そうしたところで勘定が安くなるわけのものではないと思ひになりますれば、却つて御愛想の一つでも云はれるものでございます。そんなお方を好いた方だと云ふてさわぐのは、随分頭のわるい妓で、お客様の用心持のさどりの付かない遣り方でございま

す。そんなお客様は自分の方でどんなに惚れ抜いてゐても、先様ではどうせ再度お聘ひ下さらないお方でございます。丁度呉服屋へまゐりましていろく見ましたけれども、氣に入つた縞柄がありませんので、他の呉服屋へ行つて見やうと思ふて、その店で買はずに出るのと同じやうなものでございます。心の中で自分を嫌つてゆかれるお客様を、後で泣いてもわめいても、それは追ひ付くことではございません。

それとは悟らずに屋形へ歸つて、そのお客様のことを真面目に惚氣ちらして、一人よがり喜んでゐる妓がよくありますが、こんな見當違ひのことではこの商賣はまるで失敗をせねばなりません。そんなにあつさ

りした方が好きだと思つたならば、人通りの繁しい大道に立つて、西から東に、東から西に行く人を見て惚れてごらん下さい。自分だけ死ぬほご思ひ焦れたとしましても、先様には何の事だか解らないから見向きもせずすんく行つて支舞ひます。これほどあつさりした方はございませぬ。

決して自白せぬこと

それから、他にお客をとつてゐることを、もしお馴染の客に感付かれました場合には、どんな事があつても、どんなに攻められても、又怒ら

れまして決して自白してはなりません。お客様の方ではたとへ確かな
證據が上つてゐても、自白をせぬ内はまだ半信半疑で居られるもの
でございます。なかには自白をしないでも、自分勝手に判決を下して、
それ切りにフイトお出でにならないことがございますが、そういう時に
はその疑念を晴す策略として、友達にでも頼んで、ことづけをするのが
一番いゝことと思ひます。しかしそのお友達は自分とおなじやうな人で
は先にも申しましたやうに、さうした失態のある事をまつてゐる恐ろし
い商賣敵でございますからこの傳言は半玉などにたのんだ方がよから
うと思ひます。そうしてゐる中には、又思ひ直しておいになるやうな事

もございます。もしも攻められた時自白をして仕舞ひますれば、その時
が犯罪確定の時、一生取り返しの付かないこととなりますから、この
點については、飽くまで強情を通さねばなりません。それからこれと同
じやうな意味で、もう一つお客様の感情を害ねることがございます。

お客様と遠出でをする場合

お馴染のお客様に進められて遠出をすることがございますが、妾等が
遠出をすゝめられることは、無上の樂しみが出來ます上に高い玉祝儀が
戴けますから、藝者にとつてこんなうまいことはないと思ひたいほどで

ございます。ところがこの遠出をした爲めに、折角長い間かゝつて得た
出先や、他のお馴染客を失敗することが多くございます。

そこでいよ／＼或お客様と遠出をすると云ふことに決定たときには、
心靜かに例の出先やお馴染客に、ごういふ口實を以てこれを巧く切り抜
けやうかと云ふことを考へねばなりません。もしも黙つて行つた後でこ
れが知れた場合には、それで縁切りになると云ふ位の覺悟はしてゐなけ
ればなりません。それでお客様の方では、參ります時には大層な意氣込
みで、歸つて來ればごうにでもしてやるから心配するなど、位は仰言る
ものでございますが、出先で思つた程に面白くなかつたりしますと、

存外嫌になつて知らぬ顔の半兵衛をきめこまれることが少なくございま
せん。そうなつた上に出先やお客様は失敗るとききては、それこそ目もあ
てられぬ大失敗をせなければなりません。

それで先づそう云ふ場合には、お客様のおいでになる出先へ行つて、
お女将さんか女中衆にでも、『實はこう／＼云ふ譯で止むを得ないこと
で、何所そこまで凡そ幾日間位かゝつて行つて來ますから、留守中にあ
ちらがおいでになりましたならば、妾は嫌で仕方がありませんけれど
も、大勢の藝者衆と一所に行かなければならないやうに成りましたから
行つてまゐりますが、都合によつては途中からでも逃げて歸りたいと思

つてゐます。どうぞ不悪ず」とこう云ふ具合に、さも嫌やでならぬと云ふことと、大勢で行くと云ふことと、をうまく口實にすれば、たとへそのお客がヤキモチやさんにしましても、嫌なのに行つたのなら、まア商賣だから仕方がないと、我慢をなさるやうになります。こうしておいて、行つた先きでお客様が用事でもあつて外出をされたときに、その隙を見て、

「わたしもこの土地は初めてのことでものめづらしいとは思ひますけれど、何しろ大勢の連のこととて思ふ所には行けぬ上に、お客様は私の懇意の方でない爲めに我儘も云へず、こんなつまらぬ旅行は

ありませぬ、今夜にでも逃げて歸りたいと思ひます。もしこれがアタタとの旅行であつたならば私の我儘もお聞き下さるでせうから、ごんなに嬉しいこととせう。何れにしても私は毎日歸ろうと云つて居りますから、すぐ歸して下さることゝ存じます。どうぞ不悪ず、委しいことはお目もじの上で、さようなら」

こんな意味の手紙の一通も出しておけば、大丈夫でございます。この手紙の文句の中で、大勢といふことゝ懇意のお客でないことと云ふことが、他のお客をつなぐ秘訣の文句でございます。この眞理を忘れてはなりません。

そうして歸つて來ましたならば、何よりも先きにその足で、その出先
きへ行つてお女將さんや女中衆に、手紙の文句の通りに全く面白くなか
つたといふことを大コボシすることが肝心でございます。尤も、お女將
さんや女中衆は一ツ穴のむじなでございますから、まさか大切なお客
様の感情を害ねるやうなことを並べ立てるやうな愚なことは申す心配も
ございませんけれども、敵を計るには先づ味方からと云ふことがござい
ますから、この點には如何までも用意周到でなくてはなりません。

親切な手紙は縁切り状

妾の懇意にしてゐる藝者衆にこういふことがございました。その藝者
衆のお馴染のお客様が、何時もおいでになります或る待合においでにな
りますと、女中衆が「菊子さんは昨晚何所そこのお客様と一緒に上方見
物に行きました」唯これだけをお聞きになつたそのお方は「アアそう
か」とお答へになつて、一寸近所まで行つて歸りに依るからと云つて、
それなりにお歸りになつましたが、その翌晩そのお方も大阪まで行かれ
たそうで、そうしてそのお方が汽車の中からその藝者衆に宛てこういふ

手紙をお寄越しになつたそうです。

「お前さんは私に旅行を強いて居られましたけれど、私はこれを實行して上げることが出来なかつたが、昨晚それが何人かに寄つて、出来ましたのは、お前さんの長い間の思ひ立ちを遂げられたので定めしお楽しい事で、さぞお嬉しいことでありませう。私もお前さんにそんな思ひ立ちがあつたなら、一昨晩逢つた時に、私の行先地の定宿を一寸お知らせしておいて、お前さんから電話でも一寸かけてもらへば、私は宿の女中にでも頼んでお前さんの宿屋まで、お小遣ひをお届けして上げる筈であつたものに、實に残念なことをしました。

お前さんもお客様と御一緒の事だから、お小遣位ひには不自由はないだらうとは思ひますけれど、何しろ初めての土地だから、定めし珍らしいものが眼に付くだらうと思ひます。かへす返すも残念なことをしました。いづれ歸京の上お楽しみなる物語を拜聴致します。

さようならお女将さんにもよろしく」

菊子さんは歸つて来て、直とその出先に行きますと其所のお女将さんが「お前さんにはアチラから手紙が來てるよ」と渡されると、菊子さんはもうそのお方のことが心配になつて居たものですから、手紙を受取る前に「いゝ事でせうか、わるいことでせうか」と内容の大體をきま

すとお女將さんは、「相變らず御親切なことが書いてあるよ」と云はれたので、初めて胸なで下ろしてその手紙を受取つたそうです。ところが二三日経つて、そのお方が歸つて來られてその妓にお逢ひになつて、お前は随分早かつたねえ——」と云はれると、菊子さんは「え、妾は十日や廿日位は居たかつたんですけれど、他の人達が早く歸つて支舞つたんですもの、折角行つたのに馬鹿くしかつたわ——」とこんな云はれたそうです。このやうな方はどうでせう。これではまるでお客様を無理に怒らせるやうなものでございます。前に私が申上げましたお客様を繋ぐ方法ではなくて、破壊すやうなものでございます。自分は廿日も居た

かつたけれど、他人が歸つたから馬鹿々々しいなご、お惚氣にも程があるではございせんか。それに引きかへて、お客様の方では實に情の溢れる御親切なる言葉ではございせんか、妾はこのことを聞きましたときに、全く藝者衆の考へのないことに驚きまして、こんなお客様の御親切が勿態ないと思ひました。しかし妾はこの御親切なお客様のその時の心理をこのお手紙の文句で解釋へて見ますと、この溢れるやうな親切はほんの表面だけのことではないかと思はれます。何故ならば「一昨晩逢つた時に」とありますから藝者衆の方にそういふ思ひ立ちがあつたらば、その時に何とか一口位は云つてくれてもよさそうなものに、そ

してまたその待合の女中衆にでも、一言半言位ひの云ひ置きはしてあり
そんなものには、それもしてないと云ふことは、旅行に夢中になつて居た
爲めか、それともその親切なお方に對して薄情なのか、何れにしまして
もお客様の方では心の内で随分お怒りになつて居られたに相違ないと思
ひます。並大抵のお客様ならば「随分馬鹿にしてゐる」とムキ出しにお
怒りのお手紙を寄越されるのが當然でございすのに、そこがお客の方
でも怒つて見たところで、相手が多人數をお客とする藝者だから、そん
な野暮なことを云つて量見の狭いことを人に笑はれるよりも、と云ふお
考へで、却つて反對になされたのではありますまるかと思はれます。前

にも申上げましたやうに、どうせ嫌なものにがん／＼云つたところで別
にお得のいくわけでもありませんから、態裁よく出られたものでござい
ませう。こういふ失敗はつまり度々申しあげます、お客様の心理をよく
解つてゐないところからして出來することとてございす。

お馴染客のカチアツタ場合

こゝに一つ大低の藝者の困る難儀なことがございす。と申しますの
はお馴染によばれまして待合へまゐります。とその直ぐ後へまた一人の
お馴染がおいでになつて、お聘け下さると云ふやなことがあると致しま

す。辯解ではございませんが、勿論妾にあつたのではございません。又他人様だつて滅多に度びたびある事ではございますまいが、もしそんな場合があつたと致しましたら、それは甚く困ることだろうと思ひます。先日もお友達とそんな話が出まして考へたことでございますが、どうやらその時の皆様のお話しぶりでは、後先兩方とものお客様をシクジリさうでございました、よし兩方まではシクジラないまでも大抵は後のお方を怒らして仕舞ひそうでございます。

これは勿論後にお出でになつたお客様の方を大切に致さなければなりません。先づその場合は女中衆が、「何々さん電話です」と聲をかけてく

れますから、その時には直ぐにその座を立つて、後のお客の方へまゐりまして、ホンの何でもないお客に一寸聘ばれてゐるやうな態度をして、「お客は今もう直ぐにお歸りになるんですから、一寸待つてゐて下さいね」その時の表情も餘程念入りにやらなければなりません。それから元のお座敷へ歸つて來れば必とお客様は、「後口かへ」と聞かれるに相違ありませんから、その時には「ナアニそれ程行かなければならぬ所でもございませぬ」てな調子でやつておいて、も一度女中さんに「電話です」をやつてもらひます。そして今度はもう立たないで、「電話？電話ならもう用事は判つてゐるんですよ」とお客には電話のかゝつて來ることを好か

ないやうな態度を見せておいて、そしてもう一度、何か機會を見付けて後のお客の方へ顔を出して、「お客はもう立ちかゝつてゐるんですから……」とか何とか云つて置いて、今度いよく前のお客様を送り出した時には、思ふ様後のお客様に心を盡してもてなしをする。そして兎も角今まで一人で自分の來るのを待ち乍ら、いろく想像てゐられたことをすつかり消して仕舞ふことに務めなければなりません。

こんなことだつて矢張り平常から考へておいて悪いことではなからうと思ひます。

最後の止めを刺す

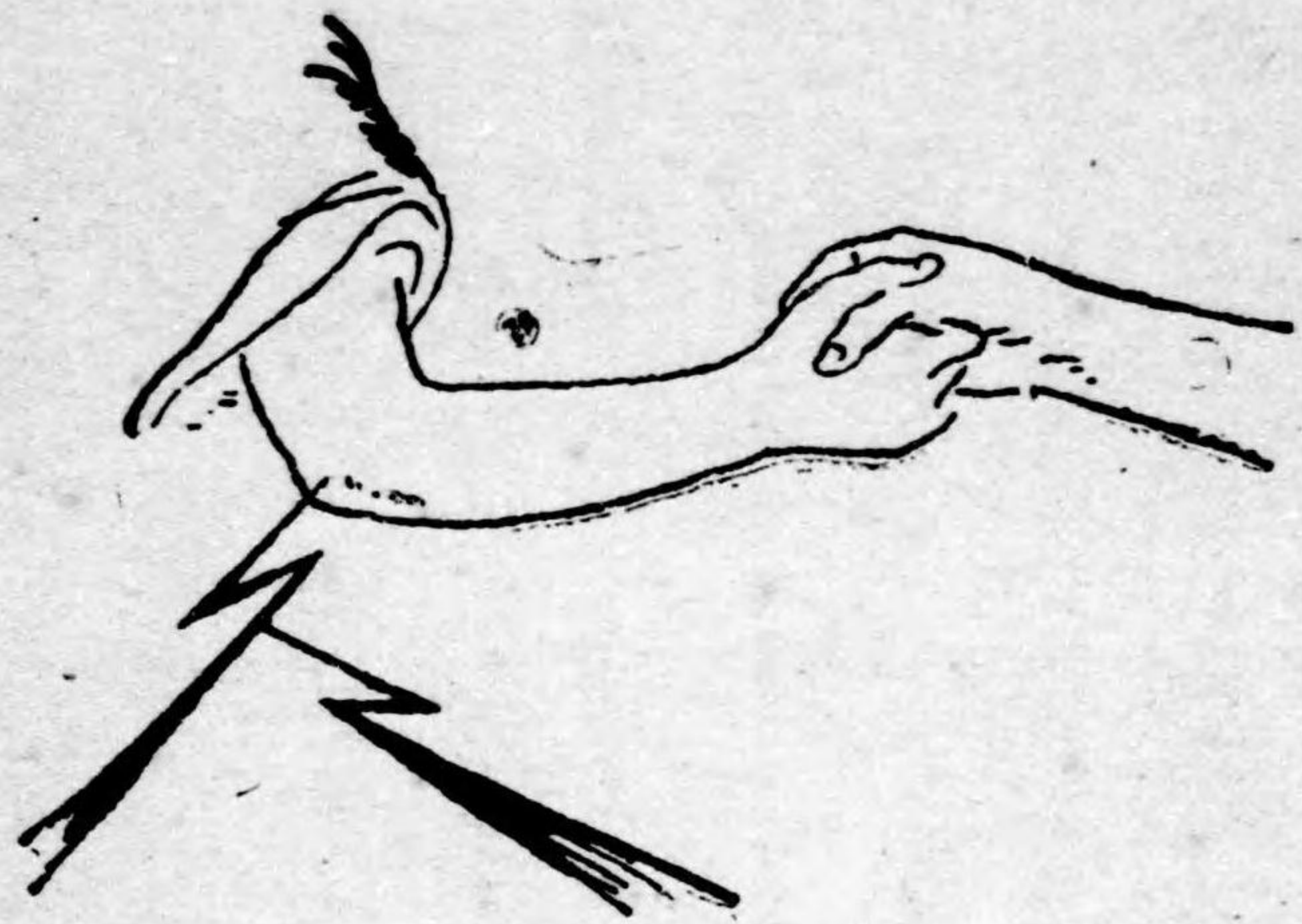
お客の心へ、自分と云ふものをクツキリ刻み込むには、先づ第一お座敷へ這入つて來たときの態度、それからお座敷でのもてなし方も大切にございますが、凡てものごとは最後のトドメを刺す事が最も肝心なことでございます。それには送り出しに注意しなくてはなりません。これも矢張りその時のお客の心理を考へることが必要で、兎も角お客は一刻も早くこんな場所を去りたい、早く外へ出たいなど、あのお座敷を立たれるものではございません。正直に申せば、時間と財布さへ氣儘になれ

ば、もつとく長く居たいと思ひ乍らも、時間と財布が思ふやうにならぬばかりに未練を残し乍らもお立ちになるもので、云はゞ親に別れるよりもつらい思ひをされること、思ひます。この呼吸をうまく取扱つて、最後に印象と云ふ五寸釘をお客の胸へ打込まなければなりません。それには矢張り態度、表情、送り出しの言葉なども必要でございますがもう一つこれはあんまり表面的に出すよりも、そつとお客の手をとつて握手をする。その握手に極々情をこめて見せるのが大切でございます。この握手にはどうしても私の發見した、「最新式情熱的電氣仕掛」の握手法でなければならぬだらうと存じます。うつかりこんなことまでお喋

りして仕舞ひまして、秘訣中の秘訣、十五年間苦心の大發見とも云ふべきものまで白状しなければならぬやうな破目になつて仕舞ひまして、今更取り返しのつかぬことをしたとは思ひますが、もう致し方がございません。どうぞせこここまで何も彼も秘訣の種をお話して來ましたのですから、最後のトドメにこれもお話致しませう。

最新式握手法

いよいよ最新式情熱的握手法の種明し下さいますが、これは、なるべく身體をお客に接近て手を取るの、勿論この時その手は暖か



くして居なくてはなりませんが一私
 はあなたの身體に觸れば、こんな
 にも熱情が高まつて、それでこんな
 にも慄へます。」と云ふことを暗示す
 るので、

その情熱的に、ブル／＼と慄はす
 方法は、相手の手を握つて、腕の關
 節の部分へ力を入れてブル／＼と
 やるのでございます。すると筋肉の

痙攣を起しますから、それが必ず相手の手へもブル／＼と通じて相
 手の心の髓にまで響くのでございます。

最初の内はそう巧くは行きませんが、少し熟練ますと、一寸人の手を
 握つても、相手の肩のあたりまでピリ／＼と電氣が通じるやうにな
 ります。

これがスナハチ妾の新発見にかゝる電氣仕掛の握手法でございまし
 て、これだけの方法をしかけますれば、今までお座敷で精々顔面の筋肉
 を動かしてゐたことも生きて來まして、お歸りになります道すがらもお
 家へお歸りになりましたしてお寢みになりましたから、何となく掌に、

暖いふつくらした手がプル／＼と慄へ乍らクツツイてゐるやうな心地がして、あの時あゝした表情をしたのも、あれも矢張り：：なんてお考へになつて、何だか妾といふものが忘れられなく時々お思ひ出しになりませうのもうこうなればシメタもので、これですつかり相手の心を自分に吸ひ付けて、そして自分を相手の心の中へ刻み込む事が出来た譯でございませう。まア時間と財布の許すかぎりは何時でも呼んで戴けると云ふ有難いことになるのでございませう。

しかもそれは満足にお客様を送り出し得た時で、時には後口がかゝつて、止むなくお客様よりも先きにお暇を戴かなければならぬときがない

とも限りませんから、この場合の事だつて考へておかねばなりません。その時にはドコマデもそのお座敷に未練ありげな表情を残して、飽くまでも丁寧にお挨拶をした後で、まア出来れば戯談まぎれに一寸握手をすることが出来ればコレをやるのでございませう。

出来るだけの親切

かやうに何もかも打明けて仕舞ひましては、アイツはけしからぬ、お客様をたぶらかしてお金を巻き上げるんだなんて、詐欺でもはたらくやうにお思ひ遊ばす方があるかも知りませんが、それは決して自分の爲め

ばがりをおもつての態度ではなく、お遊びにおいでになりますお客様のお心持を考へて、それで少しでも、それに満足をお興へ申したいとの親切心からで、最初から、「聘んでくれたから来てやつた」「お前さんなんかはいけないからお話するのも嫌で御座い」「やう〜お歸りでございますか、お蔭で妾もやつと氣が精々しました。何だいひよつとこ…おとつひおいで」と云つたやうな態度で送り出したのでは、これこそ澤山のお金をお費はし申して、大切なお隙間をお取らせし乍ら、お求めにおいでになつたものの一つも興へないでお歸し申した事になりました、これでは詐欺どころか、ぶつたくりのやうなものでございます。

云ふまでもなく、お客様は愉快をお求めにおいでになるのでございます。藝者をお聘びになりますのは、お化粧をした女の顔を見たいからばかりではございません。女早りの國からおいでになつた方でもありますまいし、誰がそんな一夜づくりののつべりしたところなごを御覽になつただけで満足遊ばすものでございませう。

自分の容貌や容姿が悪ければ悪いだけに、又美しくいと思つたら思つただけに、それだけお客様を大切にすることを表はして、至らぬ乍らも、出来るだけの心を盡してチャホヤ申し上げることが、聘ばれた藝者のつとめとして何よりも大切なことだと存じます。お客様がお料理屋、待合に

おいでになるのはソレをお求においでになるのではございませんまいか。

藝者ご衣裳の力

最後にもう一つ妾の新工風にかゝる「最新衣裳の撰擇法と」いふのを
お話し申すことに致します。

好く呉服屋の番頭さんに云はれる事でございますが、藝者衆の着物の
見立てには、誰でも暇が加ゝるのださうで、一度や二度では容易にき
まらず、それで揚句にはその歸り路にでも一寸氣の利いたものでもあれ
ば、其店で求めて仕舞ふので、結局初めの店は暇つぶし損、まことに割

の悪いことだと申します。こんなに着物の撰擇に暇がとれると云ふのは
最初から買はうと思ふ着物にどんなのがよいか、その標準がきまつて居
らないからだと思ひます。其所で、何でもかでも流行もの流行ものつて
流行ものばかりに眼をつけるのは、これは一步遅れた考へで、それより
も一步進んだ——流行の魁をするやうに考へ——して行きましたら、同
じお座敷へ五人七人一座しました時でもお客様の注意を引く事が出来や
うと思ひます。

先日も或る染屋さんに聞いた話でございますが、藝者衆でも奥様方は
誰れでも、やれ相談だの、考へて見るのとなか／＼手数のかゝる割合に

それ程氣が利いて眼立つやうなものもお誂へにならないが、そこへ行く
と女優さんなどはなか／＼大膽なもので、此方でこんなものをお思ふや
うなものでも、ごし／＼お誂へになつて仕舞ひます。それで、それが出
來あがつて見ますと、まんざらオカシなものでもなし、却つて人の眼に
立つ流行ものの魁ともなることがあるとの事でございますが、これなど
は自分の心にちやんと定めてあるからこうしてごし／＼誂へて行けるの
で、この心に定めをおくことが何よりも肝心なことでございます。

藝者の衣裳は最も大切なもので、その衣裳の力によつて其土地の一流
の組に這入ることも出來ますし、ごんな美しくしい妓でも拙い氣の利かな

い裳をしてゐたのでは、とても／＼だめでございます。出先でも土
流のお客様の時には聘けてはもらへません。それだと云つて、裳で一流
にはいるやうなことをするには、それこそ大變な資本がいることで、普
通のものには到底出來ることではございませんから、そこは頭の働さで
やらなければなりません。先づ十人並のものを買つて、それで一番目立
つことをすると云ふには、妾の考へた撰擇法によらなければならぬと
思ひます。

それからこの衣裳の撰擇法について、一寸申あげておかなければなら
ない事がございます。前にも申あげました通り、藝者はお客様といふお

得意様を奪ひ合ひ、競争を常にしてゐるのでございますから、平常自分
とよく一座をする連中を敵と見て、凡ての準備をしなければなりません。
一座をする連中のなかで一番眼立てば、十人の連中の各自が需要あつて
ゐるお客様を悉く自分に引き付けることが出来ます。これが出来れば
何處のお座敷へ参りましたも、大成功でございます。

そこでこの連中が、假りに十人あるとしますと、この十人の連中が着
てゐる裳を普斷によく心懸けてゐて、この連中よりも一際日立つものを
つくらねばなりません。たとへば今は、金砂縮緬が流行してゐるとしま
して、十人の連中が縦縞を着て居りますならば、その中で一人眼立とう

とするには、何か眼先きの變つたもの——まア横糸のはいつたものにて
もしなければなりません。

衣装の撰擇法

そこで私の撰擇法といふのは、先づ呉服屋さんにまゐりまして、例の
連中が着てゐるやうな縞柄を十反ほど並べて見ます。そしてその中へ一
際めだつ——まア横糸のはいつたやうなものでも、品がよくつて、氣の
利いたものを一反投りこんで見て、たしかに連中よりも眼立つといふこ
とをたしかめて、そして自分にふさはしいものを撰擇、決定れば決してま

ちがひはございません。この十反の縦縞をならべると云ふことは、十人の連中を立たせて並べると同じ意味でございます。つまりこれは商賣敵に先んずる方法でございます。

話は、大層後や先きになりましたが、こうして連中を敵として、自分の務めを大切に守つて行きますれば、連中のお客様はひとりどころがり込んで来るやうになります。これが商賣敵を壓倒する商賣繁昌の秘訣でございます。

惚れさせらるまで をわり

花柳哲學より觀たる藝者を買ふ男の心理 (鐵州生)

(大正五年六月國民タイムス私娼問題號所載)

近頃、私娼問題で社會が騒ぎ出した爲め、藝者までが傍杖を喰つて藝者檢徴論テナ名論を擔ぎ出した者がある。尤も藝者檢徴論は、以前から宗教家や社會學者の間には唱へられて居つたものだが、要するに是等は藝者買ひの眞味を知らない先生達の野暮論で、苟も茶屋酒の味を解する者ならば、藝者檢徴論の愚にして、一片机上の空論たるを知る筈である。然るに女通を以て任する某々氏の如きが得々として此愚論を絶叫するに至つて其意を推するに苦しむのである。僕は敢て藝者崇拜家でもなければ

ば藝者に親類のある譯でもないからごちらでも宜いが世上滔々たる野暮連様の爲めに少しく説く所あらんとす。

ト斯うしかつめらしく出ては聊か事が面倒になるが、一體、藝者買ひの眞の目的は何處にあるか、單に抑へ切れない劣情を満足させる爲めならば、即ち肉そのものを買ふのみが目的ならば、敢て比較的高價の金錢を支拂つて藝者買ひをせずとも、女郎があり、銘酒屋女がある。病氣の點から云へば、女郎は藝者より割合に安全である。女の善い點から云へば、富る酔酒屋女により多くの美人を見出すのである。然るに世上の遊蕩兒が滔々として藝者に走るものは何ぞや。是れ少くとも藝者は表面に

於て賣淫を營業としてゐないからである。女郎買ひと云ひ、淫賣買ひと云へば、直に肉そのものを買ふことになる。併し藝者を買ふと云へば、結局は肉にまで到達するとしても、其間に多少の情緒がある。之れ即ち藝者趣味が女郎趣味や淫賣趣味と其趣を異にせる點である。今日の紳士仲間について「僕は昨夜女郎買ひに行つて来た」と公言する人は恐らくあるまい。併し藝者買ひに行つたと云ふ人はある。否寧ろそれを以て誇りとする人さへある。之れ全く藝者が女郎や酔酒屋女の如く、少くとも表面には淫賣の看板を掲げてゐない爲めである。然るに今若し藝者の檢徴を實施して、或論者の如く、藝者をして一々檢徴票を所持せしむるこ

と、したならば如何、之れ藝者をして直に女郎化し、淫賣化せしむるものであつて、藝者の藝者たる最大特長を剝奪するものである。即ち藝者の名のみ存して藝者の實を没却するものである藝者を全然廢すると云ふならば可也。苟も藝者を存して置く以上藝者檢徴論は全く無意味である。試みに諸君が待合へ上つて藝者を呼ぶ、唐紙をスーウと開けて「今晚は、アリー」と入つて来て、目の前へ檢徴證をツキ付けられたならば、果してドンナ氣がします。斯くの如くんば僕は寧ろ女郎買に行くの興味多きを覺えるのである又若し、諸君が宴會に於て、席上に侍べる藝者の懷中に一々檢徴證を携へ居りしと假定せば如何。僕は寧ろ料理屋の女中

の酌で杯を傾くるの快いを知るのである。藝者檢徴は蓋し藝者の眞味を亡ぼすものである。之れに似た面白い實例がある。曾て警察署に於て、傳染病豫防の爲め、理髮師が客に接する時にオステムと云ふもので口を蓋ふやうに命じた。正直な一理髮師は直に之れをハメて仕事をした。所が顧客は、アノ床屋は肺病にちがいないと云つて、遂に來なくなつた。理髮師は、客に對する衛生を重んじてオステムを用ひたのであるが、客は反つてソレを嫌つて來なくなつた。商賣の機微は全くコ、にあるのである。藝者の檢徴も又恐らく此のオステムの如きものであらう。客は、比較的安ん安全なる檢徴證を有する藝者よりも、多少危険でも檢徴證のない

密藝者に走るであらう。水銀注射をやりながら尙ほ平氣で藝者買ひに行くのが今日花柳界の現状である此遊蕩兒の心理状態を察せずして、藝者の檢徴を行ふも、恐らく徒勞に終るであらう、況や檢徴證なるものが絶對的に病氣に對し安全を證明する者にあらざるに於てをや。藝者買ひをする程の男は黴毒の傳染位の事は百も二百も覺悟の上である。之を恐れんか、寧ろ家に在つて孤閨を守る妻君一人を愛するに若かず。要するに藝者檢徴論等を眞面目くさつて論ずる者は、宴會の席上に於て初て藝者なる者を知つた野暮天か妻君のお酌で一本の晚酌に陶然たる御目出度き先生達のみ。彼等は何れにしても藝者を論ずるの資格なきに於て同一也。

著 作 權 所 有

大正五年十二月廿六日印
大正五年十二月廿一日發

行刷

定價金參拾錢

著 者 梅藤(田)玉子
東京市本郷區森川町一番地
發行人 小野民治
東京市本郷區森川町一番地
印刷者 成田滿
東京市麴町區飯田町二ノ六番地
印刷所 公木社
東京市麴町區飯田町二ノ六番地

發 行 所

東京市本郷區森川町一番地
國民タイル社
振替東京一三六四〇番
電話下谷三〇一一・三貳一〇番

橋 彈基 君著

滑稽 番茶 一杯

菊半截
頗美本

正價卅五錢
送料四錢

滑稽にもいろ／＼ある。クスグツて無理に笑はせるやつ、下卑がかつて聞くに堪へぬもの、齒の浮くやうな洒落、イヤに皮肉を並べる滑稽などは下の部である。由來我國には眞面目で自然に出づる滑稽は少ない。本書は此の我國に缺けたる「自然なる眞の滑稽談」腹の底からムク／＼頭を上げて来て、抑へやうして抑へられぬ滑稽を以て満紙を埋め盡せり秋の夜長のつれ／＼に一杯の番茶を啜りながら本書を繙き、頭ははづれ、臍の皮はよれ、或は棒腹悶死したりさて本社罪にあらず。たゞ番茶を吹き出して疊を汚さぬやう御用心御用心。

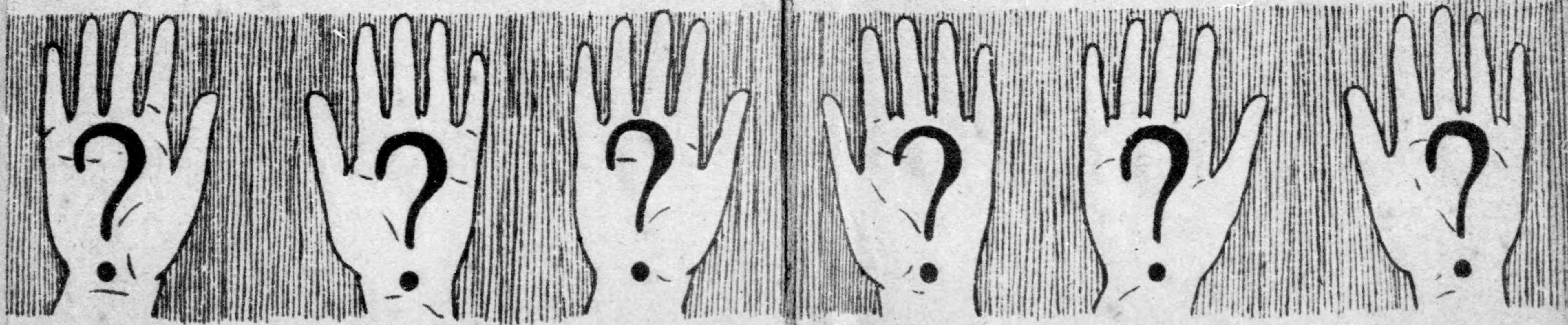
發行所

東京市本郷區
森川町一

文 成 社

振替東京一九四六七番

278
8/27



終

